

## 45 陸軍における航空医学の夜明け

黒澤嘉幸

明治四十二年寺内正毅陸軍大臣が提案したことにより、軍官合同の臨時軍用気球研究会が同年七月三十日勅令により制定された。この研究会の目的は気球及び飛行機に関する諸般の研究を行うことであった。

明治四十二年八月二十八日同会の委員が発令された。委員は直ちに作業を開始し、同年十一月同会の研究方針を決定した。この方針の第三項に写真などとならんで衛生も研究項目として掲げられたのである。しかし委員の中には軍医は含まれていなかったのである。

研究会の事業として第一に着手されたのは飛行場の選定であった。委員が関東一円を調査した結果所沢が最有力候補となり、明治四十三年八月二十三万坪の土地を購入した。その後滑走路及び格納庫等の附属設備を整備し、

明治四十四年四月にその使用が可能になった。日本最初の飛行場である。

続いて研究会は航空技術の導入を速やかに行うため、日野熊蔵歩兵大尉、徳川好敏工兵大尉を欧州に派遣し、飛行機の操縦術習得と飛行機の購入に当らせることになった。

両名は明治四十三年四月八日に購入すべき機種、習得すべき操縦術の概要について指示を受け欧州に渡航した。その後両名は操縦術を習得した上、四種類の飛行機を購入して帰国した。

帰国後飛行機を組立て整備を行った後、徳川大尉は明治四十三年十二月十九日代々木練兵場でアンリーホフマン式飛行機を操縦し、高度七十米で練兵場外周約三千米を一周した。日本における飛行機の初飛行であった。日野大尉もグラード式飛行機により同日午後飛行に成功した。

この成功に気をよくした研究会は、所沢飛行場の完成とともに飛行機を所沢に移し、飛行訓練を開始したのである。

こうした研究会の活動を背景にして、明治四十四年七月、始めて鶴岡岩三郎二等軍医が研究会御用掛軍医に任命された。この人事が航空実務と密着した航空衛生研究の発端になったものと考えられる。当時の航空衛生の研究は「高空の人体に及ぼす影響の解明(学術面)」、「航空従事者の身体的適正の研究(実務面)」の二項目であったとされている。

陸軍は所沢飛行場における飛行訓練の進捗状況に基づき、操縦術及び偵察術の教育課程を創設し、明治四十五年七月から実施することになった。教育期間は操縦術一年、偵察術三ヵ月であった。

明治四十五年二月研究会は「軍用飛行機並ニ飛行氣球操縦及び偵察術修業員身体検査要領」を制定しているが、これは本教育開始の為の準備であったと思われる。

大正二年三月研究会御用掛軍医は鶴岡岩三郎二等軍医から寺師二等軍医に交代した。新任の寺師二等軍医は大正二年六月から八月にかけて飛行機に搭乗し、高空生理学の実験を実施した。

寺師二等軍医は大正三年九月一等軍医に昇任したが、

大正七年二月一日航空医学研究の専攻学生として陸軍軍医学校に入校し、衛生学教室に入って小泉親彦教官の指導を受けた。当教室において十分な研究準備を行った後大正七年七月十二日から同二十七日まで小泉教官、寺師一等軍医、衛生学教室員四名、および強力五名は富士山に登山し、富士山頂にある山小屋の石室を借用して一週間にわたって滞在し研究した。

研究の目的は「高山の人体に及ぼす影響」であった。その内容の中には「高山における血圧の変化」などがあつた。登頂者の登山中、滞在中、下山中の血圧変化を測定したものである。

これらの研究はその後まとめられて、大正十三年の陸軍軍医団雑誌に寺師義信の名で掲載されている。この論文は陸軍部内における航空医学の最初の論文となつた。